

私立探偵

犬塚真太郎 後編

作/平野文鳥

イラスト/mimi



登場人物

*前編はこちらからどうぞ！ <http://p.booklog.jp/book/41809>

■犬塚真太郎.....私立探偵。35歳。元コルロ警察署の刑事。ドベールから娘のアンの素行調査を依頼されたが、それがきっかけで、ある事件に巻き込まれてゆく。タフで心優しいこの物語の主人公。



■ミミー.....真太郎の秘書。24歳。真太郎の元上司レトリーバ刑事部長の娘。真太郎が危険な事件に巻き込まれないように、いつも安全を祈っている。



■ドベール.....コルロタウン裏世界の元幹部。48歳。アンの父親。ある事件の裏側にかかわっている。

■アン.....ドベールの娘。21歳。児童養護施設「希望の園」でボランティアをする優しく献身的な女子大生。

■ブラッキー.....コルロタウンで悪評高い暴走族のリーダー。18歳。ウルフと呼ばれる謎の殺し屋に襲われ大怪我をする。

■シェパード.....コルロ市会議員。48歳。コルロ再開発事業を推進する中心人物。

■ウルフ.....出生、年齢不明。10年前、真太郎を辞職に追いやった謎の殺し屋。

第11話 たくらみ

深夜のコルロタウン――。

その中でもひととき華やかな歓楽街“シックスツリー”へ続く道路は渋滞していた。

「（“あの家”に嫌がらせ？ どういうことだ――）」

シェパードは進まないタクシーの後部座席から、視点の定まらない目で夜景を見つめていた。

彼は疲れきっていた。市長と伴に立ち上げた再開発計画が遅々として進まず、推進派、反対派の板挟みにあっていたからだ。

タクシーがクラブ“チワワ”に着いた。約束の時間を10分まわっていた。

急ぎ足で“チワワ”の中に入ると、会員制の高級クラブに相応しい、こざっぱりとしたボーイが近づき、シェパードをエスコートしようとした。しかし、シェパードはそれを無視してさっさとフロアの中へ入って行きドベールを探した。

客が少なかったせいか、隅のボックス席に坐っているドベールを見つけるのは容易かった。

「遅れてすまん」

シェパードはドベールの前の席に腰を下ろした。

「10分ぐらい遅れて怒るほど、俺は小せえ男じゃねえよ」

ドベールはタバコの煙をゆっくりと吐きながら、余裕の態度を見せた。

しかし、シェパードはタバコを灰皿で荒々しくもみ消すの彼の手元を見て、かなり怒りを抑えているなど思った。

「私は何も指示していない」

シェパードはドベールにきっぱりと言った。

「とぼけるな！ 地上げの黒幕が知らねえわけねーだろ」

ドベールがくっつかかった。

「しっ。声が大きい――」

シェパードは周りを見回した。

談笑していた数人の客がチラリと二人の方を見たが、すぐに何事も無かったかのように話しに戻った。ドベールは声を抑えながら話した。

「地上げは駅裏のほんの一角だったはずだ。だから俺もおまえの仕事がスムーズにゆくようにと、地上げ屋どもを手配して協力してやったんだ。堅気になった俺にはリスクがでかすぎたがな」

「わかっている。それには感謝している」

「しかし、現実はどうだ？ 駅裏の一角どころか、カレンの店や“あの家”まで巻き込んで、酒場通り全体まで広がってるじゃねーか」

「どういう事だ？」

「それはこっちが訊きてーよ！」

「天地神明にかけて誓う。私は知らない！ もしかしたら、地上げ屋連中が勝手に――」

「そんな金にならねえ事を積極的にやるような連中じゃねえよ。誰かの指示で動いているに決ま

ってる」

「誰かの指示？ 私以外の？ ま、まさか——」

シェパードはテーブルに目を落とした。

ドベールは猜疑心に満ちた目でシェパードを見た。シェパードの手が小刻みに震え、額から汗が流れていた。

二人の間に沈黙の時間が流れる——。

「（どうやらシェパードは、ウソはついてないようだ——）」

ドベールはグラスを手に取り、興奮を沈めるかのように、ゆっくりと水割りを喉に流し込んだ。そして、ひと呼吸おいて話し始めた。

「シェパード。“あの家”には俺の娘が出入りしてるんだ」

「えっ？」

「ボランティアをしているらしい」

「ボランティア？」

「あの娘（こ）は俺の人生を変えてくれた恩人だ。その恩人をこれ以上危険な目に合わせるわけにはいかねえ。だから——」

「だから？ だから、なんだ？」

「悪いが、地上げ屋連中を全員引き上げさせる」

「ちょっと待て！ それは困る」

シェパードは慌てた。

「困る？ 誰が？」

「だ、誰がって——」

「はっきり言えよ。困るのはおまえじゃなく、あの連中だろ？」

「ち、違う！」

「違うもんか。確かに、あの連中に恩を返してえ気持ちはわかる。おまえをそこまで立派な議員にしてくれたんだからな」

シェパードは唇を噛み締めた。

「だからといって、俺たちが育った“あの家”が危険な目にあっているのを、このまま黙って見すごすわけにはいかねえ」

再び沈黙の時間が流れた。

しばらくして、シェパードが口を開いた。

「今回のトラブルは、私が責任を持って処理する。もちろん“あの家”には二度と手を出させない。だから、この件はひとまず私に預けてさせてくれ——」

ドベールは答えない。

「頼む」

シェパードはドベールの目を見た。

その眼差しを確かめるように目を細めるドベール。

微動だにしないシェパードの目。

ドベールは細めた目を広げ、彼から目をそらした。

「わかった——。でも、もし約束が守れなかったら、“兄弟”のおまえでも、ただじゃすまさないから——」

ドベールはそう言うのと席からゆっくりと腰を上げ、そして店から出て行った。

シェパードはドベールの姿が見えなくなるのを見届けると、ホオーツと長いため息をついた。そして殻のグラスにブランデーを注ぎ、それを一気に飲み干した。

「（“ただじゃすまさない”か。くそっ、何でこうなっちゃうんだ）」

シェパードは上着から携帯を取り出し、地上げ屋たちのボスに連絡を取った。

「（はい——）」

低く無愛想な声が答えた。

「私だ」

「（シェパードさん？ どうされました）」

「どういうことだ？」

「（え?）」

「どうして、指示以外のことをするんだ」

「（何のことでしょう）」

「とぼけるな。おまえたち、関係のない酒場通りの店や、“希望の家”まで脅しをかけてるだろ」

「（はあ？ おっしゃっている意味が良くわかりませんが。だって、あれは、あなたの指示だったじゃないですか）」

「な、何だと！」

ボスの予想もしない返答にシェパードは動揺した。

「私の指示だと？ いつ私がそんな指示をした！」

「（おやおや。この期に及んでそれはなしですよ）」

「な、なっ——」

「（とにかく、私たちはあなたの指示で動いているんです。なんならドベールさんに確認をとりましょうか）」

「ドベール？ ふざけるな、ドベールがあんな事を許すはずがないだろ。きさまら、どういうつもりなんだ。何をたくらんでいる！」

「（たくらむ？ ヒドいなあ。私たちが一体何をたくらむというんです。ただの雇われ犬ですよ。とにかく、あなたに頼まれた仕事は1日でも早く終わらせますから。それでは）」

「ま、待て！」

ボスは一方的に電話をきった。シェパードはすかさずダイヤルを試みたが、相手が電話に出ることは二度となかった。

「（いったいどうなってるんだ——。まさか、ドベールが？ いや、自分の娘を危険にさらしてまで、そんな馬鹿なことをするわけがない。——いったい、どうなってるんだ）」

シェパードはドベールに電話をかけた。

電話のスピーカーから声が聞こえた。

しかし、それはドベールの声ではなかった――。

「（只今おかけになった電話は、電波の届かない場所か、電源が入ってないために、かかりません――）」

第12話 火事

けたたましい消防車のサイレンの音が、酒場通りを突っ切っていった。

「どこが燃えてるんですか？」

“カレンの店”から飛び出した真太郎は、同じく隣の店から出てきた数人の客のひとりに訊いた。

「この先にある、児童養護施設らしいよ」

「なんだって！」

真太郎は全速力で“希望の園”へ向かって走った。

裏通りにひしめき会う野次馬たちの頭越しに、“希望の園”を焼き尽くす炎が夜空を赤く焦がすのが見えた。

「な、なんてこった——」

真太郎は野次馬たちをかき分けながら現場に近づいた。群れの最前部にはロープが張られ、前へ出ようとする野次馬を警官が大声を張り上げながら制止している。

“希望の園”全体にまわった火の勢いは強く、消防隊員の必死の消火活動もなかなか効果をあげていなかった。

焼けただれた子ども用の自転車を見た真太郎は、園長たちの安否が気になり、思わず辺りを見回した。すると、現場から少し離れた所に停まっていた救急車の傍で、焼け出された園長とアン、そして施設の子もたちと思しき20人近くの少年少女たちが、呆然とした表情で燃え上がる“希望の園”を見つめていた。

真太郎はロープをくぐり、「施設の関係者だ！」と言いながら警官の制止を振り切って園長たちのもとまで走った。

「大丈夫ですか、園長さん！」

園長は真太郎の声に気づき振り向いた。その顔には幾筋もの涙が流れた跡があり、それが炎に照らされて赤く光っていた。まるで血の涙のように——。

「ああ、あなたは、あの時の——」

園長はそう言うと、顔を歪ませワッと泣き崩れた。

「お母さん！」

アンは園長の肩を抱き、真太郎も園長の手を取り握り締めた。その様子を見た子どもたちも、張り詰めた気持ちが緩んだかのように一斉に泣き始めた。

「きっと、あいつらの仕業よ」

アンは赤く燃える空を睨みつけながら、悔しそうに唇を噛み締めた。真太郎は彼女の言う“あいつら”が誰の事をさしているのか察することができた。

「（火をつけた連中は、きっとあの野次馬たちの中にいるはずだ。それが、あいつらの習性だ）」

真太郎は、するどい目つきで野次馬の群れを見回した。

——その頃、シェパードはクラブ“チワワ”の外で、ドベールが居そうな馴染みの店に片っ端から電話をかけまくっていた。しかし、どの店からも彼が期待する返事はなかった。

「ドベールめ。いったいどこに行ったんだ」

シェパードは、もしやと思いカレンの店に電話をかけてみた。

「（はい、“カレンの店”です）」

「カレンか？ 私だ」

「（シェパード？ こんな時間にどうしたんだい）」

「そっちに、ドベールという名前の客が来てないか」

「（ドベール？ ドベールって——もしかして、あの金融業の）」

「いるのか、いないのか！」

カレンはシェパードの別人のような荒っぽい口調に驚いた。

「（7時頃来ていたけど、もう、とっくに帰っちゃったよ）」

「7時頃？ そうか——」

「（どうしたんだい？ ずいぶん慌てて。いつものあんたらしくないね）」

シェパードはカレンの声の後ろで突っ切って行く、けたたましいサイレンの音に気づいた。

「何かあったのか？」

「（え？ ああ、サイレンが聞こえたんだね。そうなんだよ。近くにある“希望の園”という施設が火事なんだ）」

「（な、何だって——）」

シェパードは絶句した。そしていきなり携帯をきり、タクシーを捕まえる為に歓楽街の大通りへと走った。

——真太郎は、野次馬の中に、カレンの店で見た地上げ屋がいないか探し続けていた。

横にいたアンが、野次馬の中を指差した。

「あの人、見たことある！」

「どいつだ？」

「あの人相の悪い大柄の男。ボヤの現場から逃げて行った男だわ！」

アンは無鉄砲にも指差した方へと走り出し、野次馬の中へ飛び込んで行った。

「待て！」

真太郎は慌ててアンの後を追いかけた。

野次馬をかき分けながら進むアン。それを追う真太郎は、アンの先にカレンの店で会った3人の地上げ屋が立っているのを見つけた。

3人はまるで花火見物でもしているかのように、ニヤニヤしながら燃え上がる“希望の園”を眺めていた。

「待て、アン！」

真太郎はアンを呼び止めようと大声を出した。3人は声の方を振り向き、近づいてくる真太郎を見て慌てて逃げ始めた。

「待ちなさい！」

3人を追いかけようとするアンの肩に真太郎は手をかけた。

「アン、もういい！ もう、これ以上お母さんを悲しませるような事をしちゃだめだ！」

アンは追いかける足を停めた。

「ここから先は、俺に任せてくれ」

真太郎はそう言って、アンをその場に残し、3人を追いかけた。

野次馬たちを肩で突き飛ばしながら群れから出た3人は、酒場通りの狭い路地の中へ入って行った。それを追いかける真太郎が同じ路地の中へ入ってゆくと、3人がまるで待ち伏せをするかのように立ちはだかっていた。

カレンにコテンパンにされた、人相の悪い大柄の男が歩み寄る。

「てめえ、カレンの店にいた野郎だな。俺たちに何の用だ」

男はドスの効いた声ですごんだ。しかし真太郎はそれに動じなかった。

「何故逃げた」

「逃げた？ ど、どうして俺たちが逃げなきゃなんねーんだよ！」

真太郎は男の動揺を見逃さなかった。

「どうした。ずいぶん声が上ずっているじゃないか。なんか心にやましいことでもあるのか？」

「なんだと、てめえ！」

「いくら小芝居しても、その汚ねえ面に大きな文字で書いてあるんだよ」

「なにっ？」

「“火をつけたのは俺たちです”ってな！」

「なっ——」

真太郎の確信を持った台詞に、男は目を泳がせた。それは誰が見てもわかる犯行を認めたボディランゲージだった。

「誰に頼まれたっ！」

突然凄みをつけた真太郎の大声に、男は一瞬ひるみ後ずさりした。

「て、てめえ何者だ？ ここまで首つっこんで、生きて帰れると思っちゃいねえだろうな？ おいっ！」

男が顎を振って合図をすると、後ろにいた2人の男たちが、首や指をポキポキ鳴らしながら真太郎の傍へにじり寄ってきた。そして、懐からナイフを取り出し身構えた。

「今日の俺はむちゃくちゃ頭にきている。おまえら、ただじゃすまさないからな」

そう言うとき真太郎はゆっくりと深呼吸をしながら、あまり見たことのない拳法の構えをとった。

。

第13話 追跡

「けっ、そんな“はったり”が通用するか！」

2人の男たちのひとりが、ナイフを突き出して真太郎に襲いかかった。真太郎はすかさず体をかわし、ナイフを持った男の腕を思い切り蹴り上げた。ナイフが空中に飛ぶ。間髪いれず真太郎は体を回転させて、男の顔面に裏拳をジャストミートさせた。勢いのついた裏拳は男の鼻を潰した。「ふがあ！」と呻きながら、男は両手で鼻を抑えてうずくまった。

「ほお、やるじゃねえか！」

そう言い終わらぬうちに、もうひとりの男がナイフを振りかざして真太郎へ突進した。真太郎は男が振り下ろしたナイフを、すばやい後方ジャンプで避けると、近くにあったゴミバケツを持ち上げて男に思い切り投げつけた。

「ぶはっ！」

男はゴミバケツを諸に顔面に受け、仰け反るように後ずさりした。すかさず真太郎は、ゴミまみれになった男の胸に飛び蹴りを入れた。男は吹っ飛び、後ろのブロック塀に激しく後頭部をぶつけて気絶してしまった。

鼻を潰されうずくまっていた男が、呻きながらよろよろと立ち上がった。

「まだやる気か？ 今度は鼻だけじゃすまさんぞ！」

そうすごみながら、真太郎が再び拳法の構えをとると、鼻血の男は脱兎のごとく逃げてしまった。

「お、おい！ 逃げるなっ！」

逃げて行く男を呼び止めようと、後ろを向いたリーダーの男の背後に真太郎はすばやくに回りこみ、後ろ手を取って思い切り締め上げた。

「いててっ！」

「だれに頼まれた！」

「な、なんの事だ？」

真太郎は男の手をさらに締め上げた。男は悲鳴をあげた。

「さっさとやらないと、腕をへし折るぞ！」

「ま、まってくれ！ 言う、言う！ シェパードだ」

「シェパード？」

「市会議員の――、この辺の再開発計画の責任者だ」

真太郎は思い出した。新聞のコルロタウン再開発記事の写真に写っていた男。その議員の名前がシェパードだったという事を。そして、カレンと親しくしていた常連客でもあった事を。

しかし、真太郎には、俄には信じられなかった。

カレンに気に入られるような男が、まさか地上げ屋を使って“希望の園”に放火させるとは思えなかったのだ。

「放火は、そのシェパードという議員の指示で間違いはないんだな？」

「えっ？」

「聞こえなかったのか！ 放火はシェパードの指示だったのかと訊いているんだ！」

「そ、——そうだ！」

どうやらこの男は、自分の本音がすぐ顔に出る損な性格らしい。真太郎は男が一瞬見せた、とまどいの表情を見逃さなかった。明らかにウソをついている。

「きさま、この期におよんでまだウソをつく気か」

「しつけーな！ ウソなんかついてねーって言ってんだろ！」

慎太郎は男の腕を更に締め上げた。ゴキッと鈍い音がした。

「ぐわあーっ！」

男の悲鳴が路地裏に響き渡る。

「キャアーツ！」

男の悲鳴と入れ替わるように、若い女の悲鳴が響き渡った。

真太郎が女の悲鳴の方を振り向くと、逃げ去ったと思っていた鼻を潰された男が、若い女を羽交い絞めにして立っていた。

真太郎は呆然とした。その若い女はアンだったからだ。

「なぜついて来たんだ！」

「ご、ごめんなさい、だって——」

鼻を潰されたの男はすごんだ。

「兄貴をはなしえ！ しゃもないと、この女の首をへしゅ折るぞ！」

真太郎は締め上げていたリーダーの男の手を、ゆっくりと離れた。男は左手をぶらりと下げ、呻きながら真太郎から離れると、ブロック塀に頭をぶつけて気絶している男の手からナイフを取り上げた。

「形勢逆転だな。ヘッヘッヘ——」

リーダーの男は激痛で引き攣った笑いをしながら、右手に持ったナイフをぐっと握り締めた。

「（まずい——）」

慎太郎は緊張した。

「ぶっ殺してやるっ！！」

男がナイフを振りかざし、真太郎に襲いかかろうとしたその時、強烈な光が男の顔を照らしつけた。「うっ？」男はまぶしさに目を細め、動きを止めた。

「アンを放せ！」

爆音を立てて疾走してきたバイクのヘッドライトの向こうから叫ぶが聞こえた。

アンは聞き覚えのある声の主に呼びかけた。

「ブラッキー！」

ブラッキーは、急ブレーキをかけたバイクから飛び降りると、片手に持ったチェーンをブンブンと振り回しながら、地上げ屋の男たちに近づいて行った。

「誰だてめえは？ それ以上、近づくんじゃねえ！」

リーダーの男は、アンを羽交い絞めをしている男の傍へ駆け寄り、一緒にゆっくりと路地の奥へ後ずさりして行った。

真太郎とブラッキーも、男たちとの間に一定の距離を保ちながら、ゆっくりとついていった。両者は緊張しながら、路地の突き当たりにある駐車場まで進んだ。

そして駐車場に着くと、地上げ屋の男たちは入口に停めてあった1台の赤い車に近づき、ドアを開けてアンを中に放り込み、素早く乗り込んだ。

「逃げんのかっ！」

ブラッキーが叫ぶと、車はライトもつけずに急発進し、タイヤを軋ませながら真太郎とブラッキーめがけて突っ込んできた。素早く横へジャンプし、間一髪で身を交わす2人。

車は路地裏から表通りへ向かって、猛スピードで走り去って行った。

「逃すか！」

真太郎は追跡用に、駐車中の車を一台拝借しようとした。

「そんなやばい事しなくても、俺のがある」

ブラッキーはそう言うと、来た道を走って戻って行った。

「(あいつ、俺が助けた族の頭(あたま)だったな。たぶん入院していたはずだが——)」

爆音を轟かせたバイクが、真太郎の目の前で急停車した。

「乗れよ！」

「おまえ、たしか怪我してたんじゃ——」

「乗るのかよ！ 乗らねーのかよ！」

真太郎が慌てて後部座席に飛び乗ると、ブラッキーはバイクを急発進させた。

2人を乗せたバイクは、大通りへ繋がる路地裏の抜け道を巧みに走り抜け、コルロタウンの大通りへと出て行った。

「すまなかったな！」

ブラッキーは、疾走するバイクの風の音に負けないように、大声で真太郎に叫んだ。

「何が！」

真太郎も大声で答えた。

「あんたをボコボコにしちゃってさ！」

「そんな事より、運転、大丈夫か！」

「心配すんな！ 落っこちねーように、しっかり、つかまっとけよ！」

そう言うと、ブラッキーはアクセルを回し急加速した。仰け反った真太郎は思わずブラッキーにしがみついた。

バイクは大通りの渋滞の中を縫うように走って行く。真太郎はブラッキーに指示した。

「あいつらがわざわざ渋滞する道を選ぶはずがない！ たぶん、高速へ向かっているはずだ！」

「何でそう思うんだ！」

「勘だ！」

「勘？」

「信じろ！ 高速の入口へ向かって走れ！」

「わかった！」

ブラッキーは真太郎の指示どおり、高速道路へ向かってバイクのハンドルをきった。

大通りを抜け、高速道路のインターチェンジへ繋がる道に入ると、走行する車の台数が急に減ってきた。

「さすがだな！ あんたの勘はあたりだよ」

ブラッキーが叫んだ。

2人を乗せたバイクの前方に、アンを乗せた赤い車が走っていた。

第14話 倉庫街

真太郎はブラッキーに、再び指示を出した。

「気づかれないように、あいつらとの間に車をはさんで追ってくれ！」

「え？ 尾行すんのかい！」

「ああ、考えがある」

ブラッキーはバイクを減速させ、左横を走る車の後ろに回り込んだ。

しばらくして、アンを乗せた赤い車はインターチェンジから高速に乗った。

車はスピードをぐんぐんと上げ、次々と他の車を追い抜いて行った。バイクもそれに合わせてスピードを上げて行った。

「いくらスピード上げてもムダだぜ。死んでもくらいついてやる。探偵さん、しっかりしがみついでんだぞ！」

「俺が探偵だと、どこで知った」

「アンから聞いた！」

ブラッキーはアクセルレバーを全開にした。うなりを上げてバイクが急加速する。

「お、おい、死ぬのだけは勘弁してくれ！」

真太郎は悲鳴にも似た声で、ブラッキーに叫んだが、時速100kmを超えて飛んでくる風の音にかき消されてしまった。

——同じ頃。

シェパードを乗せたタクシーが、ベイエリア（湾岸地区）沿いの産業道路を走っていた。

「“あの家”が火事——。ああ、なんていうことだ。最悪だ。皆は大丈夫だろうか——」

ドベールは頭をかかえた。

「（誰かが私を陥れようとしている。一体誰なんだ？ ドベールなのか？ ——いや、違う。あいつは子供の頃からの親友、いや、兄弟だ。そんなことをするような男じゃない。でも——）」

タクシーはベイエリアの倉庫街の入口に差し掛かった。シェパードは運転手にそこで降ろすように告げた。

「お客さん、あの人に似ているって言われませんか？」

「え、誰に？」

「ほら、あの再開発の中心になってる、シェパードとかいう議員に」

運転手はシェパードから料金を受け取りながら言った。

「ああ、よくそっくりだと言われるよ。迷惑な話だよ」

シェパードは慌てて誤魔化した。

「でしょうねえ。まったく、あの議員といい、市長といい、金持ちの見方ばかりしやがって、あたしら貧乏人はやってられないですよ」

車から降りたシェパードは、産業道路の闇の中へ消えてゆくタクシーに向かって吐き捨てるように言った。

「黙れ！ やってられないのはこっちの方だ！」

倉庫街の中に入ったシェパードは、街灯もろくにない暗い道を歩き続けた。

遠くで船の霧笛が寂しげになった。潮の香りが強い。

4、5分歩くと、かなり老朽化した2つの大きな倉庫の間に建っている、プレハブ2階建ての事務所を見つけた。既に時間は午前2時をまわっているというのに、事務所内の灯りはついたままだった。

シェパードは事務所に歩み寄った。入口ドアの窓ガラスには、いかにも素人が書いたと思われるおぼつかない文字で“第一港湾サービス”と書かれてあった。

シェパードは懐から手帳を取り出しメモを見ながら確認した。

「ここだな。ドベールが紹介してくれた、地上げ屋のボスがいるのは――」

ドアをノックした。しかし返事はない。ドアノブを回してみると鍵がかけられていた。念のために2階を見上げ、様子をうかがってみたが、人の気配は感じられなかった。

「くそっ、いないのなら灯りくらい消しておけ！」

シェパードは思い切りドアを蹴った。その音が人気のない深夜の倉庫街に響き渡った。

いらつきながらネクタイをゆるめ、地面にしゃがみこんだシェパードは、懐からタバコを取り出して一服した。最初はせわしく吐き出していた煙が、しばらくすると気分が落ち着いたのか、タバコの先からゆっくりと昇っていくだけになった。

「（落ち着け。冷静になれ――。もしドベールが私を陥れようとしているのなら、必ずどこかで動き始めるはずだ。意味もなく潜伏するはずもない。その時を待て）」

そう思いながらゆっくりと立ち上がり、吸っていたタバコを地面に投げ捨てた。まだ火のついていたタバコの灰が、花火のように地面に飛び散った。

「（私だってバカじゃない。黙って罠にはまるものか！）」

シェパードは、とりあえず朝まで張り込みをしようと、事務所の隣の倉庫前に詰んであったコンテナの裏へ隠れた。

「（ここなら気づかれないだろう）」

警戒しながら辺りを見回すと、事務所の入口前に何かが落ちているのに気がついた。シェパードは何故かそれが気になり、歩み寄って拾い上げた。

「なんだ携帯電話か。誰かが落としたんだな」

電源ボタンを押してみた。ディスプレイが明るく表示された。

「えっ？」

ディスプレイに表示された着信履歴を見て、シェパードは我が目を疑った。それは、まぎれもなく自分からドベールにかけた着信履歴だったからだ。

「これは、ドベールの携帯だ。あいつはここに来ていたのか！」

——アンを乗せ疾走する赤い車は、スピードを徐々に緩め、“バイエリア”という標識のある出口から高速を降りた。

車を尾行していたブラッキーが真太郎に訊いた。

「このまま尾行したらばれるぞ。バイエリアへ向かう産業道路は、夜に車なんか一台も走っちゃいねえからな」

「くわしいな」

「へへっ。まあ、昔よく暴走（はし）ってたからな。でも、もう俺は——」

ブラッキーは何かを言いかけようとしたが、何故かそれを途中で止めてしまった。

「えっ、何て言った？ 聞こえないぞ！」

「なんでもねえよ！ で、どうすんだ、探偵さんよ」

「ヘッドライトを消せ」

「えっ？」

「ヘッドライトを消せと言ったんだ！」

「うへっ。ムチャさせるなあ。まあ、度胸試しで面白そうだけどな」

ブラッキーと真太郎を乗せたバイクは、無灯火の状態でも高速を降りた。

赤い車はスピードを落としながら、街灯の少ない暗い産業道路へ入って行った。

“バイエリアまで3km”と書かれた標識が車のヘッドライトに浮かび上がった。

「ここからは一本道だ。終点は倉庫街だ」

ブラッキーはそう言いながら、後真太郎の方を振り返った。真太郎は慌てた。

「前！ 前っ！」

ブラッキーが前へ振り返ると、前方から一台のタクシーが走ってきた。タクシーは無灯火のバイクに気づくのが遅れ、慌ててハンドルを左にきった。

「バカヤロー！」

タクシーはバイクの二人を罵りながら走り去って行った。

「まさか、こんな時間に対向車が来るとは思わなかったぜ」

ブラッキーは少し肝を冷やしたのか、その声が上ずっていた。

しばらく尾行すると、赤い車は倉庫街の入口で停まった。

「手前で停めてくれ！」

バイクは倉庫街の入口の約300mぐらい手前で停まった。

真太郎はバイクから飛び降り、地上げ屋たちに気づかれないように、中腰の姿勢で入口へ向かって走った。

地上げ屋の2人が、抵抗するアンを、車から無理やり引きずり出そうしているのが見えた。

第15話 アジト

「離してっ！」

静まり返った深夜の倉庫街に、アンの叫び声が響き渡った。

「でけえ声を出しゅんじゃねー！」

鼻をつぶされた男は、嫌がるアンの手を強引に引っ張り、逃げないように腕を後ろにねじ上げた。

「痛いっ！」

「兄貴、どうしゅましゅか？ この娘」

リーダーの男は、真太郎に脱臼させられた左の肩を抑えながら、苦痛と憎悪に満ちた顔で答えた。

「この娘はさっきの連中のダチだ。このまま帰したら、俺たちの居場所がばれてしまう」

「――しゅまつしますか？」

「え？」

「しゅまつ――」

「始末って言いてえのか？」

「あい――」

「まあ、まあ。まだ使い道はありそうだ。とりあえず、あそこへ連れて行こう」

リーダーの男は顎をふって、鼻をつぶされたの男に指示した。

3人は倉庫街の闇の中へ消えていった。

「何してんだ？ 早くあいつらを捕まえなくていいのか？」

地上げ屋たちの動きを静観していた真太郎に、ブラッキーがイラつくように訊いた。

「うかつに動くとアンが危険だ」

「でも、タラタラしてたらアンを助け出せねーぞ！」

「どうやら、ここが奴らのアジトのようだ」

「え？」

「今回の地上げ騒動は、市議員までぐるになった悪質なもののようだ。やつらを一網打尽にできるチャンスかもしれない」

「一網打尽のチャンス？ んなもん、警察に任せればいいだろ。それともあんた、でけえ手柄でもたてて、ヒーローにでも成りたいのかよ」

「ちがう！」

真太郎の怒りのこもった声に、ブラッキーは驚いた。

「奴らが“希望の園”のお母さんや子供たちにしでかした、罪の重さを思い知らせたいだけだ。関係した奴ら全員、ひとりも漏らさず！」

「（“希望の園”――）」

その言葉を聞いて、ブラッキーは昨夜の火事の事を思い出した。

入院中だったブラッキーは、アンからの連絡で火事のことを知り、病院を抜け出してバイクで現場へ駆けつけた。そして、燃え上がる“希望の園”を見ながら泣き崩れた。

子どもの頃の思い出が、たくさんつまった“家”。

自分にとって、唯一の故郷（ふるさと）だった“家”。

それが無残にも燃え尽きようとしていた。それも放火という卑劣な手段で。ブラッキーの悲しみは怒りへと変わり、放火犯を探すために酒場通り一体を躍起になってバイクで走り回っていた。そして、地上げ屋と闘っていた真太郎に遭遇したのだった。

ブラッキーは真太郎の横顔を見た。その横顔は悲しみと怒りにあふれていた。まるで、自分が育った“家”が焼かれてしまったように。

「（このおっさん、ウソはついてない——）」

ブラッキーは園長以外の“信じられる大人”に初めて会えたような気がした。

真太郎は地上げ屋たちを追って歩みを早めた。ブラッキーも遅れまいと真太郎の後を追った。

しばらく尾行すると、灯りのついたプレハブの事務所の前で、アンを引き連れた地上げ屋たちが立っているのが見えた。地上げ屋たちは警戒するかのようになり、2、3度見回した後、ドアを開けてアンを中へ連れ込んだ。

「あそこか。やつらのアジトは」

真太郎がつぶやいた。

「アンを助けに行こうぜ！」

勇んで行こうとするブラッキーを、真太郎が制した。

「おまえはここに残れ」

「なんでだよ！」

「おまえには危険過ぎる。俺がアジトへ潜入しアンを助ける」

「なんであんただけが行くんだよ！ 俺にもアンを助ける資格はあるだろ」

「資格？ いいか、あそこは人殺しなんか何とも思っていない、プロの悪党どもが潜んでるんだ。対立する族チームへの殴りこみとはわけが違う」

「な、なんだと！ 俺を馬鹿にしてんのか！」

「なんか気に障ったことでも言ったか？ 変だな。おまえはもう族とは、何の関係もなかったはずだが」

「え？」

「アンは必ず俺が助けだす。信じろ」

真太郎はブラッキーに微笑むと、まるで忍者のような中腰の姿勢で、音もなく事務所の方へ走って行った。

「（あの、おっさん、なんで俺が族を辞めちまったことが分かったんだ？ 俺の心の中が読めるのか？）」

ブラッキーは不思議な気持ちで、闇の中に消えてゆく真太郎の後ろ姿を見送った。

――コンテナの裏に隠れていたシェパードは、人の気配に気づいた。

注意しながらそっと覗いてみると、事務所の入口前に若い女を連れた2人の男が立っていた。

「(あいつらか? 地上げ屋どもは。しかし、あの若い女は何者だ。腕をねじ上げられているぞ。それに以前どこかで見たことがあるような――)」

地上げ屋たちは、若い女を事務所の中へ連れ込んだ。

シェパードは女のことを思い出そうとした。

「(そうだ! ドベールの養子の娘だ。たしか名前は――アン。いや、まて。落ち着け。こんな場所にドベールの娘がいるはずがないじゃないか。他人の空似というやつだろう)」

そう考えながら、シェパードはさっき拾ったドベールの携帯電話を見た。

「(――でも、ドベールがここに来ているのなら、娘が来ていてもおかしくはない。まさか、娘までグルなのか? そんな馬鹿な)」

疑心暗鬼に陥ったシェパードは、隠れていたコンテナの裏から出て事務所へ近づこうとした。しかし、また誰かが近づいて来る気配を感じて慌てて戻った。

闇の中から現れた男は、まるで忍者のような足取りだった。

「(あいつ何やってんだ? 地上げ屋どもの仲間じゃないのか?)」

その男は事務所の入口前で立ち止まり、辺りを見回した。事務所の窓からこぼれた光に照らされて、男の顔が浮かび上がった。

「(おや? あの男、どこかで見た事があるような。――思い出した。カレンの店に来ていた客だ。カレンがえらく気に入っていたな。しかし、なぜこんな所をうろついてるんだ?)」

シェパードはコンテナの裏に隠れたまま、しばらくその男の様子を観ることにした。

第16話 潜入

真太郎は事務所入口のドアに耳をあて、中の様子を伺った。

中は物音一つしない。

「(変だな?)」

真太郎は中が覗ける場所はないかと探した。すると入口からちょっと離れた窓ガラスの中のカーテンが、少し開いているのに気づいた。

「しめた」

真太郎はそこから事務所の中を覗いてみた。

中は狭いワンフロアで誰もおらず、入口から入ってすぐの場所に、安物っぽい応接セットが置いてあり、中央には古びた事務机が3つ並んでいた。どの机の上にも何も置かれておらず、ここで何らかの業務が行われているようには見えなかった。1番奥には2階へ続く階段があった。

真太郎は窓から離れ、2階の窓を仰ぎ見た。

「(アンたちは2階にいるのか?)」

真太郎は再び入口へ戻り、ドアノブを手にとって静かに回してみた。ドアには鍵がかかっていた。なかった。

ゆっくりとドアを開け、忍び足で中に入っていく。窓から覗いた時には気づかなかったが、応接セットのテーブルの上には大きな灰皿が置いてあり、タバコの吸殻が小さな山を作っていた。

「(違った銘柄の吸殻が複数ある。やはり大勢の地上げ屋どもが、ここに入出入りしているな)」

真太郎は2階の方へ聞き耳をたてた。誰かが歩き回るような音は全くしなかった。

「(静かすぎる)」

真太郎は奥にある階段まで進み、音を立てないようにゆっくりと昇り始めた。そして2階のフロアが見えかけたところで足を止め、気づかれぬようにそっと首を伸ばし覗いてみた。

「(えっ、どういうことだ!)」

真太郎は我が目を疑った。

2階にいるはずのアンと2人の地上げ屋が、まるで神隠しにでもあったかのように、忽然と消えていたからだ。

「(そんなバカな。確かにアンたちはこの事務所の中に入ったはずだ)」

真太郎は2階へ駆け上がり、ガランとした部屋の中を見回した。

——「(どうした? 地上げ屋どもに捕まったのか)」

シェパードは事務所の中に入ったきり出てこない真太郎のことが、少し気になった。

“ドーン!”

背後から、何かが壁にぶつかるような大きな音がした。

「(な、なんだ!)」

驚いて音がした方へ近づくと、もう一度何かが壁にぶつかる音がした。

「（どうやら音は、倉庫の中からのようだ）」

倉庫の壁に耳をあて中の様子を伺うと、中から複数の男たちの話し声が聞こえた。

「（誰なんだ？）」

シェパードは倉庫の入口を探した。老朽化した倉庫の前にはコンテナがずらりと並べられ、それらが倉庫のシャッターや非常用の出入り口を塞いでいた。まるで中への侵入を拒む城壁のように。

一番端にあるコンテナまで進むと、その横に一台のワンボックスカーがまるで隠れるように駐車していた。

「（倉庫の中の連中が乗ってきた車か？ ならば、一体何処から中へ入ったんだ？）」

シェパードは音が聞こえた場所まで戻り、壁に耳をあてた。すると、今度は誰かの怒声が聞こえた。

「どういうつもりだ！」

シェパードはその声を聞いてハッとした。

「（あれはドベールの声だ！ この中にいるのか）」

シェパードは耳に全神経を集中させた。

「悪いですね、ドベールさん。状況が変わったんですよ」

「変わった？」

「ええ、クライアントが変わりましてね。あなたも、あの議員さんも、もう必要なくなったんです」

「クライアントが変わった？ 誰だ、そいつは！」

「それは言えません。いずれにしても、あなたは知りすぎたので消えてもらいます。タイミングのいいことに、部下があなたの娘さんを連れてきたようですから、親子仲良く――」

「娘？ アンか！ ど、どういう事だ！ 何故娘を連れてきた！」

「さあね。後で部下にでも訊いてみてください」

「ま、待てっ！ 娘は関係ない。頼む、娘だけは放してやってくれ！」

シェパードは聞き捨てならない会話の内容に動揺した。

「（いったい何を話してるんだ。クライアントが変わった？ ドベールも議員も必要ない？ 議員って、もしかして俺のことか？ 消えてもらう？ 娘？ やっぱりさっきの娘はアンだったのか）」

“ドカツ！”

「キャアーツ！ 父さん！」

ドベールが殴り倒される音と、アンの悲鳴が聞こえた。

「（まずい！）」

ドベール親子の身を案じたシェパードは、ドベールを痛めつけている連中の気を引こうと、思わず倉庫の壁を何度も激しく叩いた。

「だれだっ？」

倉庫の中からざわめきが聞こえた。

「おいっ、だれか外を見て来い！」

「おす！」

走ってゆく複数の足音が聞こえた。身の危険を感じたシェパードは、その場から離れ、他の隠れ場所を探した。

――事務所の2階で途方にくれていた真太郎は、隣接する倉庫側にある窓の方から、駆け上がる複数の足音に気づいた。危険を感じて身構えると、突然、窓が開き、人相の悪い男が飛び出してきた。

「なんだあ？ てめえ！」

飛び出してきた男が、いきなり真太郎に殴りかかった。すかさず真太郎は体をかまし、男の腹に膝蹴りを入れ、襟首をつかんで事務所の階段まで持ってゆき、そのまま1階へ蹴り落とした。

「ずいぶん変な場所から出迎えてくれるじゃないか」

そう言いながら真太郎は、次に窓から飛び出そうとした男の顔に、強烈なアッパーパンチをくらわせた。男は殴られた勢いで仰け反り、後ろへ倒れ、後方にいた2人の仲間たちを巻き込みながら階段から転げ落ちた。

真太郎は窓の外を覗いた。そこは隣の倉庫の中だった。どうやら事務所の2階の窓は、隣の倉庫の出入り口だったようだ。出入り口の階段の下には、転げ落ちた3人の男たちが気絶していた。

真太郎は窓から階段を降りようとした。すると、不審な音を聞きつけた別の男たちが、階段に向かって走って来た。

「ぞろぞろわいてきやがったな。ゴキブリどもめ」

真太郎は、ためらわず階段を降り始めた。

「て、てめえ、いつのまに！」

階段下までやって来た3人の男たちの1人が、真太郎の顔を見て驚愕した。

その男はアンを連れ去った、あの地上げ屋のリーダーだった。

真太郎は階段を降りる足を止め、男を睨みつけた。

「アンはどこだ？ アンを返せ！」

第17話 救出

「生かして帰すな！」

リーダーの男は、残りの2人の男に命令した。

2人は手にナイフを持って、真太郎に向かって階段を駆け登って行った。真太郎はためらわず階段から飛び降り、先頭の男の顔面に強烈なジャンプキックをおみまいした。男は後ろへ吹っ飛び、後続の男を巻き添えにして階段から転げ落ちた。真太郎も男たちと一緒に階段下へ転げ落ちたが、すかさず体制を立て直し、リーダーの男のもとへ突進した。

「ヒッ！」

リーダーの男は真太郎に背を向けて逃げようとしたが、あっという間に捕まり右腕をねじ上げられてしまった。

「ギャッ！」

「アンはどこだ！」

「ううっ——」

「聞こえないのか！」

真太郎はさらに強く右腕を上へねじ上げた。

「いてえーっ！ 奥だ！ 奥にいる！」

「そうか。ありがとうよ」

真太郎は腕を思い切り上へねじ上げた。ゴキッという鈍い音がした。

「ぐわあーっ！」

両腕を脱臼させられ、そのままへたりこんでしまったリーダーの男を見やっつて、真太郎は倉庫の奥へ向かって走った。

倉庫の奥へ通じる廊下には大量の荷物が詰まれ、視界をさえぎっていた。

真太郎は荷物の影からそっと顔を出し、奥のフロアを覗き見た。そこにはロープで縛られたアンが椅子に坐わらせられ、その周りには3人の地上げ屋とスーツ姿の男が緊張した表情で身構え、こちらを睨みつけていた。

「（どうやらアンは大丈夫のようだ。ん？ あれは——）」

地上げ屋たちの足元で、ロープに縛られて転がっている男に気がつき驚愕した。

「ドベール？ ドベールじゃないか！ なんてあんなどころにいるんだ！」

“パン！”

一発の銃声と熱風が、真太郎の顔を斬るようにかすめていった。思わず荷物の後ろに顔を引っ込める真太郎。

「（ふっ。悪党どもの伝家の宝刀が出たな）」

銃を持った地上げ屋たちが向かってくる足音が聞こえる。真太郎は再び出入口の階段へ戻った。

階段の下には、リーダーの男が両腕をブラブラさせながら、苦痛に顔を歪ませて立っていた。

「ひーっ！ もう勘弁してくれえ！」

男は戻って来た真太郎を見て怯えた。

「来い！」

「え？」

「いいから階段を上れ！」

真太郎はリーダーの男を盾代わりにしながら、階段を上った。

「いたぞ！ 撃て！」

「バ、バカッ！ 撃つな！」

盾代わりになったリーダーの男が、必死の形相で叫んだ。状況を察した追っ手の男たちは、撃つの一瞬ためらった。

真太郎はリーダーの男を引き連れ、窓から事務所の2階へ入った。

追っての男たちが階段を上ってくる足音が聞こえる。その音が次第に真太郎たちに近づいてきた。

「悪いが、ちょっと協力してくれ」

「な、なにをやる気だ——」

真太郎はリーダーの男を窓に立たせた。

階段を上っていた追っ手の男たちは、突然、目の前に現れた仲間を見て驚いた。

「くらえ！」

そう叫ぶと、真太郎はリーダーの男の尻を思い切り蹴った。男は階段へ向かって吹っ飛んだ。

複数の悲鳴があがり、リーダーの男と地上げ屋たちが、階段から激しく転げ落ちて行く音が聞こえた。

「“地の利”は多いに利用しないとな」

真太郎は窓から階段下を覗いた。リーダーの男と複数の男たちが、山のようになって倒れていた。

“パン！ パン！ パン！”

難を逃れた1人の男が、真太郎に向かって連射した。真太郎はすかさず身を隠した。

「おらおらーっ！」

男は自らを奮い立たせるかのように、怒声をあげながら階段を駆け上がった。そして窓から事務所の2階に飛び降り、銃を構えて真太郎を探した。

「どこに隠れた！ 出て来い！」

“パン！”

地上げ屋は威嚇の銃を一発撃った。

「回転式か。今時、古風だな——」

「そこか！」

“パン！ パン！”

地上げ屋は真太郎の声がする方めがけて撃った。

「おい、ずいぶん気前よく撃つな。弾は大丈夫か？」

事務所の階段の下に隠れていた真太郎は駆け上がり、男に突進した。

男は慌てて銃を撃とうとしたが、既に弾はきれていた。真太郎は男の顔のド真ん中に、ストレートパンチをくらわせた。勢いのついたパンチをもろにくらった男は、後ろに吹っ飛んで気絶した。

「残り弾ぐらい、数えて撃てよ」

真太郎はパンチで痛めた右手を振りながら、倉庫への階段を駆け下りた。

「（もう、手下はいないはずだ）」

そう確信しながら、真太郎は奥のフロアまで駆け、そして飛び出した。

「アン！ ドベール！」

捕らえられていた2人が、真太郎に声の方へ振り向いた。

「探偵さん！」

「真太郎！」

1人だけになったスーツ姿の男が、すばやくアンの背後に回りこみ、頭に銃を突きつけた。

「近づくな！」

真太郎は足を止め、スーツ姿の男に向かって叫んだ。

「おまえが地上げ屋のボスか？」

男はそれに答えず、口を歪ませニヤリと笑った。

「なんでこんなまねをする？ ドベール親子が、いったい何をしたと言うんだ」

「クライアントの命令ですよ」

「クライアント？ シェパードという議員のことか？」

「そうです——。こいつらが邪魔だから、消してくれと頼まれましてね。酒場通りの嫌がらせも、放火も全部シェパードの指示です」

床に倒れていたドベールが叫んだ。

「うそつけ！ シェパードは自分が育った“家”に火をつけさせるような男じゃない！ おまえら、地上げの裏工作の罪を、全部シェパードと俺になすりつける魂胆だろうが！」

「黙れ！」

“パン！”

男が撃った弾がドベールの肩に当たった。

「キャアーツ！ 父さんっ！」

アンは絶叫した。

「ドベール！ 大丈夫かっ！」

真太郎が叫んだ。ドベールは真太郎とアンを安心させるかのように、苦痛に満ちた表情で頭を2度縦に振った。

男は、アンに銃を突きつけたまま彼女を立ち上がらせた。

「ドベールさん。あなた元悪党だけあって、さすがに勘がいいですな。なら、わかるでしょ？ 私たちは金と力のある方の見方です。その相手が誰だろうが」

ドベールは吐き捨てるように言った。

「きさまら、昔の俺の恩を、仇で返すのか！」

「恩？——。ふざけるな！」

突然、激昂した男は、その口調を別人のように荒げた。

「あんた、兄貴分のくせに、俺たちを見捨てて組織から逃げたじゃねえか！ “新しい生き方がしたくなった”とか、わけのわからねえヌルい事ぬかしやがって！」

ドベールは昔の事を思い出し、表情を変えた。

「その後、俺たちが組織でどんなヒドイ目にあったか、知らねえとは言わせねえぞ！」

「組織？ 父さん——」

アンは始めて聞いた事実に驚愕し、目を大きく見開いた。

「おやおや、これは申し訳ない。娘さんの前でまずい事をやってしまったようですな。ではお詫びに、親子仲良く、楽しい冥土の旅に招待してあげますよ！」

「ははあ、なるほど——。おまえら、本物のバカだな」

真太郎がつぶやいた。

「な、なんだと？」

男は目を釣り上げ、銃口を真太郎の方へ向けた。

「しよぼい小金で殺しまでやるつもりか？ ずいぶんサービスがいいもんだ。おまえらも、その新しいクライアントに利用されているのが、わからないのか」

「どういうことだ！」

「その足りない頭で考えてみろ。クライアントはおまえらを使ってドベールと議員を消した後、次におまえらを消すに決まっているだろうが！」

「な、なに言ってる！」

男は自信を持ってしゃべる真太郎に動揺した。

「安っぽいシナリオが見えてくるぜ。——地上げの裏仕事を計画した悪党議員シェパードと、彼から地上げを委託された元悪党ドベールは、いざこぎのあげくお互いの命を奪い合った。おまえらのクライアントは、すべて2人のせいにして地上げを成功させる。で、そのシナリオを知っていた雑魚のおまえらは邪魔だから、おまえらより格上の悪党に消させる——。どうだ？」

「ば、ばかな！ ど素人の市長にそんな悪事が——」

真太郎は、男が思わずもらした言葉を聞き逃さなかった。

「市長？ きさま、今、市長と言ったなっ！」

「う、うるせーっ！」

“パン！ パン！ パン！”

男は狂ったように真太郎に向かって銃を乱射した。その内の一発が真太郎の顔をかすり血が飛び散った。真太郎はそのショックでガクリと膝を突いた。

「探偵さんっ！」

アンは無我夢中で、銃を持つ男の手に噛み付いた。

「何しやがるっ！」

男はアンを思い切り突き飛ばした。

「キャア！」

突き飛ばされたアンは、床に転がっているドベールの上に、覆いかぶさるように倒れた。

男は銃を構え、うずくまっている真太郎の方へゆっくりと歩み寄った。

「全員、皆殺しにしてやる。最初はクソ生意気なおまえからだ！」

“ドーン！ ドーン！ ドーン！”

男が真太郎へ銃口を向けたその時、後方から倉庫の壁を激しく叩く音が聞こえた。

「なにっ？」

思わず後ろを振り向いた男の隙について、真太郎は猛烈な勢いで飛びかかった。それに気づいた男は振り向きながら銃を撃ったが、弾は真太郎の体をかすめ倉庫の荷物に当たった。真太郎と男が激しくぶつかった。男はその勢いで後ろにひっくり返った。すかさず真太郎は男の上に馬乗りになり、顔に強烈なパンチを食らわせ、銃を持った腕をつかんで床に激しく叩きつけた。威勢をなくした男の手から銃がこぼれ落ちた。

「しばらく眠ってろ！」

真太郎は男のボディーに、とどめのパンチを入れた。男はグウといって気絶した。

「アン！ ドベール！」

真太郎は男の銃を拾い上げ、倒れているアンとドベールの傍へ走り寄り、2匹を縛っていたロープをほどいた。

「大丈夫か、アン？」

「はい。それより、父さんが――」

真太郎はドベールを抱き起こした。銃で撃たれた肩に血が滲んでいた。

「心配するな、かすり傷だ――」

「とにかく、外へ出よう」

アンと傷ついたドベールをいたわりながら、真太郎は2人を外へと導いた

第18話 絆

事務所の外へ出た真太郎たちに、ブラッキーが駆け寄った。

「大丈夫か、アン」

「ブラッキー、どうしてここに？」

「あの探偵のおっさんと一緒に、おまえを追いかけて来たんだ。それより、そこのおっさん大丈夫なのか？ 肩から血が出てるぜ」

「父なの——」

「えっ？」

ブラッキーは、アンと男を見た。

「そうか——。その人か。おまえの人生を変えてくれた恩人ってえのは」

ドベールはブラッキーが言った“恩人”という言葉にはっとした。アンが自分に対してそんな言葉を使っていたとは知らなかったからだ。

「アン、おまえ——」

アンは、首を横に振った。

「ううん。それは昔のこと。今は違うわ」

「（恩人じゃ——ない？）」

ドベールは、アンに自分の過去を知られたことを思い出し、今まで大切に育ててきたアンとの“絆”が崩れ去ることを覚悟した。

「恩人以上の人よ。だって私の——お父さんだから」

「（アン——）」

ドベールは胸から湧きあがる言葉にならない熱いものを感じた。そして、それは彼の傷ついた心と体を優しく癒していった。

「だれだっ！」

突然、ブラッキーが叫んだ。倉庫前のコンテナ裏から見知らぬ男が出て来た。

真太郎は地上げ屋の残党が襲って来たと思い身構えた。——しかし、それは違っていた。事務所からもれる灯りに照らされたその男の顔は、真太郎の見覚えのあるそれだった。

「シェパードか！」

ドベールが叫んだ。

「ああ。大丈夫か、ドベール」

ネクタイをだらっと緩めた男は、目の下にクマを作り、疲れきった表情で答えた。

シェパードはドベールの手前でその足を止めた。

「さっきの音が役にたったようだな」

「おまえ、こんなところで何を——。音？ そうか！ さっきの壁を叩く音はおまえだったのか」

「すまん——」

「なぜ、あやまる？」

「おまえのことを疑った」

「どういうことだ？」

「おまえが俺を騙したと思った。だから、おまえがいそうな場所を探し回って、ここまでやってきた」

「俺がおまえを騙すだと――。てめえ」

ドベールはシェパードの胸倉をつかんだ。

「父さん、やめて！」

「やめろドベール！ その議員も騙されてたんだ。それに、さっき音を出してくれなかったら、俺たちは助からなかったかもしれないんだぞ」

ドベールはハツとし、我に戻ってつかんだ手を引っ込めた。

「そうだった――。俺はおまえに感謝こそすれども、責める筋合いなんかない。それに、最初に疑ったのは俺の方だったからな。すまない――」

ドベールは頭を下げた。

「やめろ、ドベール――」

沈黙の時間がしばらく流れた――。

アン、ブラッキー、ドベール、シェパード――。4人を見ていた真太郎は、何故か全員が見えない何かで結ばれているような気がしてならなかった。

「地上げ屋どもが寝ている間に警察を呼ぼう。いいかい？ ドベール。議員さん」

ドベールとシェパードが顔を見合わせた。

警察を呼ぶということは、すなわち、2人が今回の事件に関わっていたことが、白日の下にさらけ出されることを意味した。それは言い換えれば、2人が今までの人生で築き上げてきたものを、全て失うということでもあった。

2人は沈黙した。

「かまわん」

しばらくして、ドベールが覚悟したように力強く答えた。

シェパードは沈黙を続けていた。

真太郎がもう一度訊いた。

「いいかい？ 議員――いや、シェパードさん」

シェパードはドベールを見つめた。ドベールは何かを伝えるような優しい眼差しで頷いた。シェパードもそれに答えるかのように、首をゆっくりと縦に振り、そして小さな声で言った。

「わかった――」

そして、ガックリと膝を落とし、まるで皆に懺悔するかのようになり始めた。

「俺は出世したかった――。出世して“あの家”の母さんや、家族を喜ばせたかった――。“私たちの家から偉い人が生まれたんだよ”って家の皆に自慢させたかった」

アンとブラッキーは驚愕して顔を見合わせた。まさかシェパードがあの子の出身だったとは、夢にも思っていなかったからだ。

「でも、そんな欲が、結局、皆の“家”を奪ってしまった――。“あの家”の母さん、家族、そして“

あの家”から巣立った皆の故郷（ふるさと）を俺は壊してしまった。俺は、俺は、本当に馬鹿だった——」

シェパードの目から光るものが一つ落ちた。

ドベールはシェパードの肩に優しく手を添えた。

「気にするな、シェパード——。それでも俺たちや家族だよ——」

その言葉に、シェパードの肩は小刻み震え出し、目からいくつもの光るものが落ちていった。

2人の会話を聞いていたアンとブラッキーは、全員が同じ“絆”で強く結ばれている事を、そして全員が“あの家”の紛れもない家族だという事を実感した。

皆との心の距離が、急に縮まったように感じたブラッキーが口を開いた。

「おい、おっさん！ クヨクヨすんなよ。俺も“あの家”の家族だけど、“家”がなくなっても、皆が元気だったら寂しかねーよ」

「（え？）」

アンは心は震えた。あのブラッキーが始めて“あの家の家族”と言ってくれた。小さな頃から人を信じず、心を閉ざしていたあのブラッキーが、ついに心を開いてくれた。その事が嬉しくて、アンは胸が一杯になった。

「どうした、アン？」

アンは涙をこらえて、微笑んだ。

「ブラッキー、あなたの言うとおりによ——。私も寂しくなんかないわ」

2人の言葉に元気づけられたシェパードは、うなだれていた頭を上げた。

アンはドベールとシェパードに言った。

「悪いことをしたなら、それは償わなければなりません——。でも、私は、いつでもお父さんとやり直す覚悟はあるわ。もちろん、シェパードさんとも。だって私たち、皆、同じ“家”で育った、同じ故郷（ふるさと）をもつ家族だから——」

「アン！」

ドベールはアンに駆け寄り、彼女を抱きしめた。

「お父さん！」

抱き合うドベール親子。それを静かに見つめるブラッキー。そして、救われたような顔をしてたたずむシェパード——。真太郎は皆を見やり、そして空を仰いだ。

空はその色を漆黒から濃い青へ変えようとしていた。

真太郎は少し気が咎めたが、やはり罪は罪としてケジメをつけようと、警察に連絡する為に少し離れた場所へ移動しようとした。

すると目の前に1人の男がスッと現れた。

「（だれだ？）」

その男はどこにでもいそうな、サラリーマン風の男だった。

「ヒヒヒヒ——。偉いお方に頼まれて、ゴミ掃除にきた」

その不気味な笑い声に気がついたブラッキーが叫んだ。

「気をつけろ！ そいつ、このまえ俺を殺そうとした男だ！」

真太郎は思い出した。

「きさま、ウルフだな」

ウルフは無言のまま懐から銃を取り出すと、抱き合うドベール親子に向かって銃口を向けた。

「危ない！」

シェパードがドベール親子の前へ飛び出した。

“パン！　パン！　パン！”

ウルフが撃った銃の弾が、ドベール親子の盾になったシェパードの体を貫いた。

「キャアーツ！」

アンが絶叫した。真太郎はすかさず奪い取った銃を懐から取り出し、ウルフに向かって撃った。弾はウルフが持っていた銃を弾き飛ばした。真太郎が2発目を撃とうとすると、それより早くウルフは体を横へジャンプさせ、近くのコンテナの裏へ逃げた。

真太郎はシェパードへ駆け寄った。

「おいっ、大丈夫か！　ブラッキー、救急車だ！」

「わ、わかった！」

地面に倒れたシェパードの胸から血が流れ出ていた。ドベールがシェパードを抱き起こしながら絶叫した。

「シェパード！　シェパード！」

血の気の引いた青い顔のシェパードが、虚ろな目をしながら小さな声で言った。

「ドベール——」

「なんだっ？」

「やっぱり、“家”のお母さんが言ってたとおりだったな——」

「え？」

「悪いことすると——バチが、あたる」

そう言うとシェパードは静かに目を閉じた。

「な、なに言ってやがんだ、シェパード！」

真太郎はシェパードの手首をとり、脈を診た。

「大丈夫だ。まだ死んでない。ブラッキー！　救急車が来るまでシェパードの傷口を抑えといてくれ！」

真太郎はそう言いながら、持っていた銃を護身用にとドベールに手渡し、地面に転がっていたウルフの銃を拾いあげた。銃のグリップには血がついていた。地面を見下ろすと、ウルフが逃げ去った方向に小さな血痕が点々と続いていた。

「決着をつけてやる！」

真太郎は血痕を頼りに、ウルフの後を追いかけて行った。

第19話 10年目の対決

血痕を頼りにウルフの後を追いつける真太郎は、いつのまにか倉庫街の外れにある、港の栈橋まで辿り着いていた。

血痕は栈橋の手まで消えていた。

「どこへ行った？」

真太郎は周りを見渡した。栈橋の横には、高さが50メートルは超えそうな、鉄骨だけでできた巨大な船舶用のクレーン塔が立っていた。

「（この景色はどこかで見たような――）」

真太郎は軽いデジャブに襲われた。

「（そうか。10年前だ。俺が刑事だった頃、ウルフを捕らえ損なった場所とそっくりだ）」

封印していた忌まわしい記憶が再び甦った。しかし、今となってはその記憶から逃げ出すことはできない。真太郎は、刑事という職を奪い取られた、あの屈辱の日の記憶を思い出そうと試みた。

「（ウルフは、あの日、警察の裏をかいて1番目立つ場所に隠れた――）」

あたりは夜明けを迎えようとしていたが、まだ夜の闇があちらこちらに靄（もや）のように居座り、視界を妨げていた。

真太郎はクレーン塔を見上げた。鉄骨だけでできた階段の1番上の踊り場に、闇に隠れた人影らしきものが見えた。目を凝らしてそれを見続けると、その人影が動いた。

「いた！」

真太郎は鉄製の階段を、カンカンと音をたてながら駆け上がった。夜明け前の薄暗い光に浮かび上がる倉庫街が足元に広がっていく。高所恐怖症には耐えられない高さだ。遠くから救急車とパトカーのサイレンの音が近づいてくるのが聞こえた。

「ウルフ、もう逃げられんぞ！」

ウルフがいる踊り場の下に辿り着いた真太郎が叫んだ。

「チッ！」

ウルフは開き直ったような態度で、踊り場からゆっくりと階段を降りてきた。

真太郎は改めてウルフの風貌を見た。よれよれの背広にネクタイ、禿げ上がったすだれ頭、悪い病でも患っているのではないかと思わせるほど、やせ細った顔に無精髭。それは誰がどう見ても、うだつがあがらない中年サラリーマンだった。しかし、そんな容姿だからこそ相手を油断させ、殺しを成功させる事ができたのだろう。

ウルフは階段の途中で足を停めると、鮫のような感情のない目で真太郎の顔をじっと見つめた。

「おまえ、どっかで見たことがあるな――」

「覚えてないのか？ 10年前に、おまえを追い詰めたコルロ署の刑事だ」

ウルフは、しばらくポカンとしていたが、突然けたたましい声で笑い始めた。

「ヒーッヒヒヒ！ 思い出した。せつかく俺を追い詰めたのに、ご丁寧に逃がしてくれた、あの

マヌケな刑事だな？ しかし、ずいぶんおっさんになっちゃったな」

「だまれ！ あの時はしくじったが、今度は逃がさない！」

「ほお、俺を捕まえるつもりか？ なら、やってみな」

そう言い終わるや否や、ウルフは目にも止まらぬ速さで懐からナイフを取り出し、真太郎の胸を狙って投げた。しかし右手を銃で怪我していたせい、ナイフは真太郎の胸を大きく外しコートの淵を切り裂いて地上へ落ちて行った。

真太郎は懐から銃を取り出そうとしたが、それより早く、ウルフは階段から真太郎めがけて飛び降りた。狭い踊り場で2人の男がもつれ合う。ウルフは懐から2本目のナイフを取り出し真太郎を刺そうとしたが、真太郎はそれを手で払い、ウルフの顔面に頭突きをくらわせた。ウルフはよろよろと後退して、踊り場の手すりに体をぶつけた。

真太郎は、懐から銃を取り出しウルフを狙った。

「ここまでだ、ウルフ！」

ウルフはぎょっとした。しかし、真太郎の銃を指差して嘲るように笑い始めた。

「ヒーッヒヒヒ！ それは俺の銃だな？ そんな銃が使えるものか。よく見てみろ。おまえがさっき弾き飛ばした衝撃で、安全装置がぶっ壊れてるぞ」

「なにっ？」

真太郎は思わず銃に視線を落とした。

「マヌケっ！」

すかさずウルフが投げたナイフが、真太郎の右腕に突き刺さった。真太郎は思わず手から銃を落とした。銃は踊り場から転げ落ち、塔の鉄骨にぶつかりカンカンと音をたてながら、50メートル下の地面に向かって落ちて行った。

「ヒーッヒヒヒ！ 笑っちゃうな。こんな単純なウソにひっかかるとは。10年たってもマヌケはマヌケだ」

そう言うと、ウルフは懐から3本目のナイフを取り出した。

「俺を恨むなよ。恨むんだったら、てめえのマヌケさを恨むんだな」

真太郎の心臓を狙ってナイフを振りかざし、まさに投げようとしたその瞬間、ウルフの顔に光があたった。

「うっ？」

ウルフはまぶしさに目を細めた。光は水平線から昇った朝日だった。

真太郎はその一瞬のスキを見逃さずウルフに飛び掛った。勢いあまった2人は絡み合いながら踊り場の手すりにぶつかり、手すりを背中にして真太郎の下になったウルフがナイフを真太郎の左肩に突きたてた。

「うっ！」

痛みには耐えかねた真太郎は、後ろへジャンプしてウルフから離れ、反対側の手すりにヨロヨロともたれかかった。大量の血が鉄板でできた踊り場にポタポタとこぼれ落ちた。

「死ね！」

ウルフはもたれかかった手すりから体を起こし、体勢を整えると、ナイフを腰にあてて、とど

めをさそうと真太郎めがけて突進した。しかし、鉄板製の踊り場にこぼれた真太郎の血に足をすべらせ、バランスを崩し、つんのめりになりながら真太郎の横の手すりにぶつかった。勢いがついていたウルフの体は、まるで鉄棒運動のように手すりを中心にしてグルリと1回転した。ウルフはナイフを捨て夢中で手すりをつかんだ。手すりから飛び出したウルフの体は、かろうじて右手一本で体を支える宙ぶらりんの状態になってしまった。

「た、助けて――」

真太郎は横で命乞いをするウルフに目をやった。

このまま放って置いたら、いずれ落ちて死ぬだろう。正直、心の奥でそれを望んでいる悪魔の心の自分がいた。しかし、それでは事件の真相を握る証人を失ってしまう事になる。

真太郎は右腕からナイフを抜き、ウルフにその腕を差し出した。

「つかまれ」

ウルフは手すりをつかんでいない左手で真太郎の手をグツとつかむと、真太郎を引きずり落とそうと下へ強く引っ張った。

「何をする！」

「ヒヒヒ。勝負は下駄をはくまで、わかんねーんだよ！」

「ぐあーっ！」

真太郎は右腕の激痛に悲鳴をあげた。そして、思わず左手で右手をかばおうとした時、左肩から流れ出た血が、手すりを握っていたウルフの手の中にボタボタとこぼれ落ちた。

「く、くそっ。すべる――」

ウルフは手すりをつかんでいた右手を血ですべらせて離し、真太郎の腕をつかんでいた左手一本で体をささえる、宙吊りの状態になってしまった。

ウルフの全体重が真太郎の右腕にかかる。真太郎は激痛に再び悲鳴をあげた。

必死の形相のウルフは、右手で手すりをつかもうと試みたが、血ですべってうまくいかなかった。

「えっ？」

ウルフは焦った。

真太郎の腕をつかんでいた左手が、しだいにすべり落ち始めたからだ。それは、真太郎の腕から流れ出る血のせいだった。

「ヒッ！」

ウルフは思わず右手で真太郎の腕をつかもうとした。しかし、すべる己の手を止めることはできなかった。

「うわあーっ！」

真太郎の腕からヌルツと手が離れたウルフは、地上へ向かって落ちて行った。真太郎は思わず目をつぶった。

――にぶい音がした。

しばらくして目を開けると、50メートル下の地面に大の字になって倒れているウルフの姿があった。

「（ウルフよ。きさまは自らが傷つけた相手の血によって、自らを罰したんだ――）」

満身創痍の真太郎は手すりから離れ、おぼつかない足取りで階段をよろよろと降りて行った。
そして、途中の踊り場でよろけて倒れた。

コートのポケットから何かが落ちた。

それはミミーからもらった“お守り”だった。

「おかげで助かったよ――。ありがとう、ミミー」

水平線からまぶしい太陽が昇り、あたりを明るく照らし始めた。

第20話 家族

コルロ総合病院の一室で、上半身を包帯だらけにし、点滴のチューブを腕に刺した真太郎がベッドに横たわっていた。

その傍らには、見舞いに来ていた秘書のミミーが椅子に坐っていた。

「痛みます？」

「こんなの傷の内に入らないよ。ハハハ——」

真太郎はミミーに余計な心配をかけまいと、わざと作り笑いをした。

「でも、大事に至らなくて本当によかった。あ、今、アイスコーヒー作りますね」

ミミーは病室隅にある小さな洗面所で、アイスコーヒーを作り始めた。

真太郎は横目でミミーを見た。ミミーは右手で涙をぬぐっていた。

「(すまん、ミミー)」

真太郎はアイスコーヒーを飲みながら、朝刊の大きな見出しに目をやった。

“コルロタウン再開発に巨悪の影！ ブルドック市長に事情徴収。逮捕は時間の問題か？”

ミミーが真太郎に話しかけた。

「父が言ってましたわ」

「え？」

「今回の事件は、市長と大手ゼネコンと組んだ裏組織が黒幕だ。でも、地上げ騒動はまだ氷山の一角。叩けば次々とボロが出てくるはずだ、って。父は、絶対全貌を暴いて、全員に罪のつぐないをさせてやるって、張り切ってましたわ」

「なるほど。——ところで、シェパードとドベールはどうなった？」

「シェパードさんは重体でしたが、一命は取りとめたそうです。ドベールさんも思ったほど傷は深くなかったようで、今、警察の取調べを受けているそうです」

「そうか——。あと、アンとブラッキーは？」

「先日、警察で事情徴収を受けたあと、自由になったと聞いていますけど——」

軽くドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

ミミーが答えるとドアが開き、見舞いの花束を持ったアンとブラッキーが顔を見せた。

「やあ、アン、ブラッキー！ よく来たな」

真太郎は思わぬ訪問者に顔をほころばせた。2人は照れくさそうに部屋の中に入ると、花束を真太郎へ渡した。

「犬塚さん、花ってがらじゃないだろ？ 俺は酒かタバコがいいってアンに言ったんだけどね」

アンが申し訳なさそうな顔をして、うつむいた。

「いやいや、そんなことはないよ。きれいな花だ。ありがとう。やっと、俺のことを名前と呼ん

でくれたな」

「へへへ——」

ブラッキーは照れ笑いをした。その笑顔は、暴走族で頭（あたま）をやっていた頃がウソだったかのように、明るく、さわやかだった。

「アン」

「はい？」

「だいじょうぶかい？」

真太郎は、アンの気持ちを察して優しく声をかけた。

「はい、ありがとうございます」

アンはにっこりと微笑んで答えた。

「今日の朝、父から電話をもらいました」

「何て言ってた？」

「俺に代わって、犬塚さんに礼を言っといてくれと。あと、しばらく家には戻れそうにもないから、俺の代わりに仕事を引き継いでくれと」

「ハハハ——。あいかわらず仕事熱心な奴だな、ドベールは」

「その仕事のことですが——。実は、今やっている仕事を全て廃業させ、資産全部を使って“希望の園”を建て直し、運営の手助けをする手続きを取ってくれと言われました」

「え？」

予想もしないアンの報告に、真太郎とミミーは驚いて顔を見合わせた。アンは話しを続けた。

「父は言っていました——。

新しい“希望の園”を建てることだけで、すべてを解決させようとは思ってない。

これからは、“あの家”で育ち、社会へ巣立って行った家族の故郷（ふるさと）が、もう二度となくならないように、そして“新しい家”で暮らす家族がいつも笑顔でいられるように、俺は残りの人生をすべてかけて守る。それが“あの家”で育ててもらった不良息子の、せめても“親孝行”だ、と——。そのことをお母さんに話したら、とても喜んで下さいました」

「そうか——」

真太郎は、二人からもらった花束を見つめながら微笑んだ。

「——と、言うことは、ドベールさんは“希望の園”のお父さんになるのかな？　じゃあ、シェパードさんも、いつでも安心して“家”へ帰れますね」

ミミーが嬉しそうな顔でアンに言った。

「はい！」

アンは目を輝かせながら答えた。

「ブラッキー。大きなお世話かもしれないが、おまえはこれからどうするんだ？」

真太郎が訊くと、ブラッキーは頭をかきながら照れくさそうに答えた。

「俺？　俺は“新しい家”ができれば、そこで兄貴になって、子供たちの面倒をみてあげる事にしたんだ。だから、これから資格を取る為の勉強をしようと思ってる」

真太郎の顔が明るくなった。

「そうか、頑張れよ。でも、おまえの乱暴な運転だけは、子供たちには絶対教えるんじゃないぞ」

「えっ？ そんな事しねーよ。まいったなあ——」

病室内に4人の明るい笑い声が響いた。

「それでは、私たち、このへんで失礼いたします。カレンさんも心配されていたので、今から報告に行きます」

「カレンに、傷が治ったらまた店に行くと言っといてくれ」

「わかりました」

アンとブラッキーは、真太郎とミミーに向かって深々と頭を下げてお礼をし、部屋から出ようとした。

「アン！ ブラッキー！」

2人が真太郎の呼びかける声に振り返った。

「なんででしょう？」

アンが応えた。

「なんかあったら、いつでも気軽に俺の事務所（ところ）に遊びに来てくれ。君たちの“家”は別にひとつじゃなくてもいいんだろ？」

「——！」

真太郎の優しい言葉に胸が一杯になったアンは、溢れてくる涙を止められなかった。

言葉が出ないアンに代わって、ブラッキーが答えた。

「ありがとう——。犬塚さん」

2人は頭を下げ、病室を出て行った——。

「よかったですね」

ミミーは真太郎の方を振り返って言った。

「ああ——」

真太郎は窓の外を見ながら答えた。

「ミミー」

「はい？」

「新しい“希望の家”が完成したら、お祝いに行こう——」

「ええ。もちろん！」

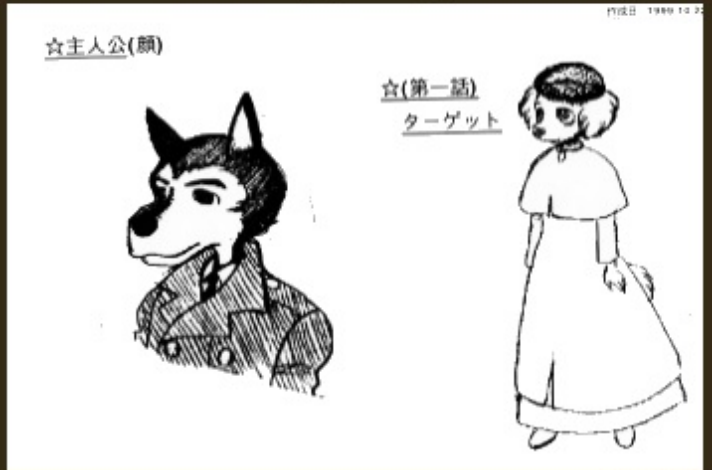
ミミーは真太郎が見ている窓の外を見た。

外には青空が広がり、大きな雲の横に、小さな雲がいくつも連なっていた。

それはまるで大空の家に住む家族のようだった——。

私立探偵 犬塚真太郎

— 終 —



私立探偵 犬塚真太郎～後編

<http://p.booklog.jp/book/43540>

著者：平野文鳥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hiranobuncho/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43540>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43540>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.